大江健三郎の二種類の軍隊

―― 否定形と肯定形 ――

藤田敏明

はじめに

大江健三郎の小説[1]にしばしば登場する＜軍隊＞的な組織の役割について考えてみたい。

彼の小説には，多く＜戦い＞の構図が明示されている。主人公を含め登場人物たちは，特定の，個人・組織・国家に対し，或いは，漠然とした＜状況＞なるものに対し（前者が後者のメタファー，乃至その逆，と考えれば，要するに同一のものであるが），何らかの＜戦い＞を自らに課する。この＜戦い＞のなされ方も様々で，空想的・思索的なもの，現実的なもの，積極的な殴り合いや消極的な逃亡計画等，と挙げられうる。この＜人物＞単独で＜戦う＞場合もあれば，何らかの＜集団＞に加入することもある。

ここでは後者を対象とする。＜戦い＞を営むため，＜人物＞がある＜集団＞に加入した時，その＜集団＞が一つの機能的な＜組織＞であり，さらにその＜組織＞自体の目的として＜戦い＞を標傍しているとすれば，これは一個の＜軍隊＞的機構を持つと言えるだろう。

本稿では，この種の＜軍隊＞的組織（以下単に＜軍隊＞として扱う）の，各各の作中における機能について考察を試みる。

ここで大きく類型化すると，この＜軍隊＞は，二種類に区分できる。一つは，作中では＜軍隊＞として機能しない，いわば否定形のものであり，今一つは，作中で現実に＜軍隊＞として活動する。肯定的なものである。そしてこの二種の差異は，それぞれの作品の，小説としてのあり方そのものに深く関わっている。

一　否定形の軍隊

具体的な資料採集として，以下の項目について，作品各々を検討する。（順序は発表年代順）

a．＜軍隊＞の名称（具体的に記されていない場合は，本稿の筆者が別宜上

仮称を与える）

b．作品内における，具体的な活動

c．＜人物＞との関係

(1)　「偽証の時」[2]

a．「歴史研究会」：その＜上部＞

b．＜スパイ＞容疑の＜贋学生＞の監禁。彼に逃亡された後は，その事実の湮滅工作。

c．＜私＞は，監禁の有効性に疑問を持ちながらも加担し，＜贋学生＞を縛り，手にかみつかれる。湮滅工作にも加わるが，やがて大がかりの＜偽証＞に耐ええず，反抗するが，無視される。

(2)　「見るまえに跳べ」[3]

a．ベトナム軍：エジプト軍

b．伝聞により，存在が示唆される。

c．＜僕＞は，日本の平和に飽き，これらの＜民族解放軍＞に加わることを夢見るが，その機会が与えられると尻ごみしてしまい，軽蔑され，自己嫌悪に陥る。

(3)　「戦いの今日」[4]

a．パンフレットを印刷した集団

b．米国キャンプで，脱走を勧誘するパンフレットを配布させるが，実際に脱走した米兵には，援助を拒む。

c．主人公兄弟は，友人を通してこの集団と接触し，パンフレットを配る。援助を拒否されたため自力で米兵を匿うが失敗。

(4)　「われらの時代」[5]

①　a．アラブ人の対仏抵抗組織

b．メンバーである来日アラブ人が，南靖雄に，彼らとの協力と＜連帯＞を要請する。

c．南は，最初は＜連帯＞を拒むが，一夜の＜回心＞の結果，これを受け容れる。が，渡仏の機会が失われてしまうと，この＜連帯＞意識も消滅する。

②　a．＜民学同＞

b．指導者，八木沢は，革命組織＜民学同＞について，南に説明し，参

加を要請する。

c．八木沢は<民学同>の構成員を<四年以内に革命的状況が生ずる>という幻想で導いているが，彼自身はこれを信じておらず，むしろフランス留学を夢見ている。

(5) 「青年の汚名」(6)

a．荒若島青年団

b．団長・隆次は，島を<長老>による支配から救うためクーデタを企画し，そのシンボルになるよう<荒若>を説得する。クーデタ　は，長老の策略により未遂に終る。

c．<荒若>は，クーデタのため，彼らのシンボルになることを受諾するが，長老の策略で汚名を着せられ逃亡すると，青年団員までが彼を追求する。

(6) 「遅れてきた青年」(7)

① a．対米軍抵抗組織

b．敗戦直後，進駐米軍へのゲリラ戦を呼びかける宣伝ビラを撒く。

c．<僕>は，これに参加するため山村を出発するが，たどりつけず捕えられ，感化院に送られる。

② a．「戦う日本の会」

b．<私>をスパイ容疑で監禁し，リンチを加える。

c．<私>は，最初からこの<会>の理想など信じていない。リンチされたことへの復讐のため，泥沼的戦いを挑み，会のリーダーの一人を自殺に追いこむ。

(7) 「叫び声」(8)

a．エジプト軍

b．日本で志願兵を募集中，と噂される。

c．<僕>たちは応募しようとするが，デマと判明する。

(8) 「日常生活の冒険」(9)

① a．エジプト軍

b．日本で志願兵を募集中，と噂される。

c．<僕>と斎木犀吉はこれに応募する。<僕>は日本を離れられずに終り，犀吉は，出発し，香港まではたどりついたが，そこでUター

ンする。

② a。ベン・ベラ軍

b。犀吉は，自殺を装って，この軍隊に参加したのかも知れない。

c。もしそうなら，犀吉の青春は主題を貫いたことになるのだが，しかしこれはやはり<僕>の妄想だろう。

以上，八作品から十一種の<軍隊>を抽出したが，これらを，各々の存在様態によって類型化すると，以下のようになる。

A：<代表者>型

○<民学同>

○アラブ人組織

○荒若島青年団

登場人物は，これらの<軍隊>の，指導者や代表と直接対面し，<戦い>の計画を聞かされる，が，これらの<戦い>は，ついに実現せず，計画のまま，終る。

B：<上意下達>型

○「歴史研究会」：<上部>

○<パンフレットを印刷した集団>

○<戦う日本の会>

主人公は，これらの<組織>のありようについて，間接的に知っているのみで，<上部>の方針に，納得できない。抗議しようとしても，黙殺されてしまう。

C：<伝聞>型

○エジプト軍・ベトナム軍（「見るまえに跳べ」）

○エジプト軍（「叫び声」）

○対米軍抵抗組織

○エジプト軍（「日常生活の冒険」）

○ベン・ベラ軍

噂・宣伝ビラ・デマ・妄想であって，現実には存在しない。存在するかのように思えても，地理的に遠方であり，これに参加したくとも，たどりつけぬまま終る。

このように分類した後，改めて，これらの共通項を考えると，各々の<軍隊>における実際の<戦い>の欠除，ということになる。

各<軍隊>は，自ら「～軍」「～解放組織」と名乗り，或いはビラ，パンフレットを発行することにより，<戦い>への志向性を表明し，それによって主人公をも<戦い>にまき込もうとする。ところが現実的には，少なくとも，作品テキストに見られる，限られた時空間においては，何らの<戦い>も，なしえていないのである。作品ごとの活動内容 ―b項― についてふり返ると，計画について「要請する」「説明する」「募兵していると噂が流れる」だけなのである。わずかに，誰かを監禁し，リンチするという場合があるが，この活動は<軍隊>としての「暗黒面」を露呈し，主人公を離反させることにしか作用しない。

一方，主人公との関係 ―c項― を回顧すると，「裏切られる」「連帯意識が消滅する」「たどりつけない」である。原因が<軍隊>の側にあるのか，主人公にあるのかはひとまず置くとして，主人公は，<軍隊>の，真正の構成員としては組み込まれえない運命にある。(10)

すなわち，ここに挙げたものは，皆，各自のみの，<戦わざる軍隊>なのである。さらに，その特性について強調するなら，一度は自らの存在価値，<戦い>への志向性について言及しながらも，<戦い>は顕在化させない，すなわち存在価値を消去する，いわば，<否定形の軍隊>である。先に分類した中でのC型，特に，「叫び声」「日常生活の冒険」におけるような，噂だけのエジプト軍が，この<否定形>の代表と言いえよう。

そこで，この<エジプト軍>を中核に置いて考え直してみると，今までに挙げた<軍隊>なるものが，そもそもの初めから，<否定されるべきもの>としてしか扱われていなかったことが判明する。これらの<軍隊>は，<軍隊>としての活動は，本来，許されていなかったからこそ，<軍隊>と名乗ることができたのである。

この理由の一半は，主人公が<軍隊>に対して望んでいたものが，本来<戦い>ではないということに帰因する。が，それについて考える前に，大江作品の今一種類の<軍隊>，今度は<肯定形>のそれについて検討し，比較する必要がある。

二　肯定形の軍隊

（各作品，検証の，項目は，前章と同じである）

(1) 「万延元年のフットボール」[11]

① a。万延元年における<一揆>

b。主人公兄弟の曽祖父の弟が主謀し，目的を達成。

c。兄弟はこの<一揆>を調査・解釈し，自らが生き方の一つの指針[12]とする。

② a。S次兄の参加した<略奮部隊>

b。朝鮮人部落を襲撃，S次兄は，その過程で<戦死>

c。兄弟はこれについて解釈を試み，自らの生き方の一つの指針[13]とする。

③ a。フットボールチーム

b。鷹四はチームを設立，リーダーとなり，<暴動>を引き起す。

c。密三郎は鷹四を批判する。弟は兄に見放されて自殺し，<暴動>は鎮静。

(2) 「洪水はわが魂に及び」[14]

a。自由航海団

b。日本からの脱出航海を目指し，来たるべき大地震に備え，盗み，車の破壊，武器の収集をし，殺人に関与する。最後には<核シェルター>に籠城し，機動隊と銃撃戦を展開，ほぼ全滅。

c。中核の若者たちは，<自由航海団>の存在価値[15]を信じ，それに殉ずる。大木勇魚は，最初は彼らに<まきこまれた>形だったが，自発的に彼らの<言葉の専門家>を務めることによって，<鯨と樹木の代理人>としての自己を確認[16]する。

(3) 「同時代ゲーム」[17]

a。村＝国家＝小宇宙

b。大日本帝国正規軍に対し，<五十日戦争>を挑み，敗亡することによって，自らの独立国としての価値[18]を確認する。

c。村人は全員，この独立戦争に自身の存在価値を見出している。語り手，「僕」にとっても，この村＝国家＝小宇宙の神話と歴史を語ることが，唯一の存在[19]価値である。

前章の<否定形>と対照すると一目瞭然であるが，これらの作品の<軍隊>は，皆<戦い>のために存在し，<戦い>を営み，主人公たちもそれに積極的に従事しており，要するに<軍隊>そのものである。そこで，

第 I 型 ： 否 定 形
第 II 型 ： 肯 定 形

と図式化し，双方を対照させつつ，各々の作品内での地位や構造，機能について，検証しよう。

三 想像力と事実性

まず，いくつかの項目ごとに，単純に図式化してみよう。

	否 定 形	肯 定 形
① ＜戦い＞への意志	有	有
② ＜戦い＞の実践	無	有
③ テキスト内の潜在性	有	無
④ テキスト内の顕在化	無	有
⑤ 主人公との距離	遠 方	内 在
⑥ 主人公との関係	拒 否	包 含

＜否定形＞においては，既に述べた通り，＜戦い＞の実践が表層に顕われていないわけだが，一歩進んで，＜存在様式（ありかた）＞そのものを考えると，その実在性が，容易には確認できないことに気づく。つまり,＜民学同＞が，＜存在する＞と言っているのは八木沢一人であり，脱出勧誘のパンフレットは存在するが，それを印刷した＜導団＞とは直接に接触できず，＜エジプト軍＞は，遠くエジプトにあるため，はたして実際にあるのかどうかわからない。テキストの中に＜潜在性＞として隠されており，表面に＜顕在化＞せず，主人公は，これにたどりつくことができない。ある意味ではこの＜潜在性＞の曖昧さが，主人公を魅了することになる。先に代表格として挙げた＜エジプト軍＞は，「叫び声」「日常生活の冒険」「見るまえに跳べ」の，主人公を初めとする数多くの若者たちの＜願望＞の対象であり，＜想像力＞の産物である。そして，この若者たちにとっては，エジプト軍の，＜軍隊＞としての＜戦闘行為＞が主眼ではなく，自分たちの＜現状＞打破のための＜脱出＞が，重要になる。「日常生活の冒険」に書かれてある通り，彼らは「実戦向きじゃない義勇兵」なのである。

類型化して言うと，主人公たる若者は，自分自身の＜今・ここ＞の状況に絶望しており，常に＜ここより他の場所＞[20] への＜脱出＞を夢見ている。こ

の<脱出>の契機として，たまたまそこにあった（あるいは，わざわざ苦労して捜して来た）のが<軍隊>であり，彼らは，この<軍隊>に加入さえすれば，<跳ぶ><冒険><脱出>が可能になるものと信じ（信じようとし），そこに<行動>を見出す。「叫び声」の<エジプト軍>はヨットの，荒若にとっての<青年団>は，脱出用の船の，代用品である。<民学同>主謀者のはずの八木沢さえ，本心はフランス留学を夢見ているのだ。

しかるに，彼らは結果的には，<軍隊>に加入できない。外的な障害で「たどり着けない」，自らの臆病さゆえに逃げ出す，<軍隊>そのものに疑問を抱く，等，理由は様々だが，彼らは，<軍隊>の，正統なるメンバーとして所属することはできない。一度はその名簿に名を連ねたとしても，裏切られ，失望し，脱落し，敵対することになる。一言で言えば，彼らは<拒まれている>のである。

この理由の一つは，<軍隊>が，彼らにとって，想像力による<願望>の対象でしかないことである。しかし，一方の，<軍隊>そのものに目を向けると，こちらもまた，凝視するほど不明瞭になり，遠ざかり，実在性が怪しくなる。作品テキスト上で，実際の<戦い>を営まない<軍隊>は，主人公を拒むのみならず，読者に対しても，その<軍隊>たるゆえんを顕わすことを拒んでいるのである。

さて，ここで，作品内における，プロット構造の中での<軍隊>の機能を考えよう。希求する<軍隊>に<拒まれている>主人公は，この<拒否>ゆえに，以前よりいっそう深刻に閉塞的な<状況>へと追いこまれる。この<状況>が臨界点に達した時，彼は，絶望的・自滅的な<行動>へと走り，それが作品のクライマックス――破局（カタストロフ）――となる。<軍隊>は，自らの中に彼を包含して<戦う>ことではなく，彼を，その外部に庶断することで，より絶望的な<戦い>の契機となる。

一方，<肯定形>の場合はどうだろうか。

<戦い>を志向する登場人物は，晩かれ早かれ<軍隊>内部に入り（或いは<軍隊>を組織する中核となり），その渦中にあって，実際の戦闘行為を体験する。一人の兵士として，目の前の敵を打ち，殴り，壊し，殺すのである。

万延元年の<一揆>，フットボールチームの<略奪><暴動>，自由航海団の寵城戦>，<五十日戦争>いずれも，<兵士>らの前には，<行為>がある。<想像力>を飛翔させて誤解を産む余地のない，銃撃，殺人，仲間の死，という<事実>がある。これらの<事実>は，既遂のものとして，作品の語り手によって，言葉に書き換えられる。登場人物は，<戦い>について<語る>前に，盗

み，撃ち，殺し，殺される。<戦い>自体が，彼らの存在証明 — identity[21] — であり<戦い>の記述が，作品のテキストそのもの，それも，プロットの構造の上からは，クライマックス —破局(カタストロフ)— となる。

以上のことを考慮した上で，先の対照表に，いくつかの事項を付加しよう。

	否　定　形	肯　定　形
⑦ <戦い>の語り	未来形／仮定的	過去現在形／破定的
⑧ <軍隊>(<戦い>)の語り手	登場人物	作品の語り手
⑨ 人物への影響	想像力の刺激物	彼のidentityそのもの
⑩ プロット構造の機能	触媒	プロットそのもの
⑪ 事件展開との関係	遠心的	求心的

<否定形>が，登場人物の想像力を刺激はするが，自身は作中では何ら活動しない，いわば<触媒>であるのに対し，<肯定形>は登場人物を内包し，彼と共に<戦い>を営む<実体>である。<戦い>の時空間において<戦い>に自分自身の，identity を見出す彼は，即ち，自らを<軍隊>として identity — 同定 — し，一体化する。この関係を，そのまま移項すると，前者が，プロット構造の中で，事物を刺激して事件展開の<触媒>であるのに対し，後者は，プロットそのものとして identify — 同定 — される，ということになる。

<否定形>では，<軍隊>については，語り手の声部ではなく，登場人物の誰かの発話や，ビラ，噂，等 — つまり，括弧でてくることができ，テキストの一次的な<語り>からは一段階離れていて，責任が免除されている発話 — によって，しかも，未来形・仮定形によって，<戦い>の計画が言及されるが，決してテキスト内で顕在化しない。<軍隊>そのものは，これらの，二次的に語られた発話の背後にその実住 — むしろ不在 — を隠し，その<向う側>から作品のプロットを刺激し，事件を生起させ，その結果に対しては責任を持たない。

<肯定形>は，作中のプロット構造の中に確実に組み込まれている。登場人物を自らに固定すると同時に，プロットそのものに固定される。そして，<戦い>は，作品テキストの語り手によって，責任をもって<事実>として語られる。

こう比べると，両者の間には，小説としての構造上の，大きな差異があるこ

とが判明する。ここで，年代記風に言うと，

＜否　定　形＞　：　初　　期（1957年）～　中　　期（64年）
＜肯　定　形＞　：　中　　期（1967年）～　現　　在

となる。そうすると，この変化は，作家・大江健三郎の＜成長＞とも考えうる。ひとまず結論を出すとすれば，たとえば，以下のように言いうる。

大江は，「日常生活の冒険」から「万延元年のフットボール」に至る時期（つまり64～67年の数年のうちに），＜軍隊＞＜組織＞＜戦い＞という事項について，理解を深めた。二十代末から三十代に至る人間的成長，さらに，少年時の実際の＜軍隊＞＜戦争＞体験から距離を置いたこと，或いは50～60年代の＜新左翼＞による＜闘争＞からも距離を置いたことにより，それらに＜参加（アンガジュ）＞するという＜行為＞の本質が何たるかについて，冷静，客観的に見きわめ，それゆえ，これについて，未来形・仮定的表現でなく，確定した事実として語りうる能力をえた。すなわち，＜若者＞の＜戦い＞から距離を置いたゆえんである。

世代論的評論としてはこうも言えよう。
だが，事は，＜軍隊＞＜戦い＞についての語りのみに限らない。これは＜語り＞の，すなわち，小説のありかたそのものの問題なのである。

四　作品の＜核＞

否　定　形	→	肯　定　形
仮　定　形 未　来　形 一度言及し，否定 触　　媒	→	確　定　形 過去形・現実形 最初から存在 identity

これは，既に小説の型の問題である。言葉と，それによって refer [22]——指示——されるものとの関係，すなわち，記号としての言葉の使われ方の差である。
＜肯定形＞においては，作品内に，何らかの＜核＞たる＜事実＞があり，そ

の求心性によって，作品内の他の要素をそこに収束し，それらについて保証する。<否定形>は，そのような<核>を持たず，むしろ否定して，想像力によって各要素を遠心的に拡散させ，何の保証も持たない。

ここで，大江の<小説作法>というべきものについて，年代記的にふり返ろう。

初期（1950年代）の短篇には，<核>が，視覚的影像として顕われているものが多い。「奇妙な仕事」[23]の犬の群れ，「死者の奢り」のプールに漂う死者，「鳩」[24]の，壁に吊るされる動物，等がこの好例である。これらの作品では，それぞれの視覚的イメージが作品世界全体を覆い，その事件進行を一手に引き受けている。

<闘争>について扱った「偽証の時」，そしてもっぱら「われらの時代」以後の長篇において，本稿で名付けた<否定形>が表われる。すなわち，その内部の<事象>一つによって，作品内世界を制御するような<核>が喪われる。あるいは，<核>たるべき<事象>が，<事実>として顕われる以前に，言語表現の先行によって上滑りし，その実係たる内容を開示することなく，言語の<向う側>へ，遠ざかってしまう。

「<われら>の<時代>」，「（戦争に）<遅れてきた青年>」，「<日常生活>の<冒険>」，「（時代に対する）<叫び声>」，という標題，さらに，作中に見られる，<革命>，<戦争>，<連帯>，<ここより他の場所>，<正統 —— authentic な世界>，<アフリカ>，<朝鮮>，<脱出>，等のキイワードは，いずれも，テーマ性は豊かながら，抽象的であり，その指示物は，テキスト内の人物の発言という間接的なものの，さらに仮定や未来の形において，実体の裏打ちなく，想像力の彼方へ拡散してしまう。<軍隊>は戦わず，<革命>は起らず，逃亡の目的たる<ここより他の場所>は，夢の彼方にしかない。

大江の<転換点>（ターニング・ポイント）は，65年の「個人的な体験」[25]である。今，ここでは多くを述べないがこの作品では，それまでに語られ続けてきた<仮定的未来>への<脱出>が否定され，それに代るものとしての，<確定的現在（既遂の存在）>への<忍耐>が主張される（内容に即して言えば，<頭が二つあるかのように見える奇型の息子>を，殺してアフリカへ逃亡するという計画を，一度言及した後に拒否し，[26] 最大限の努力を払って息子をひきうける決意をするわけである。）この作品の<核>には，<頭が二つあるように見える瘤を持った赤んぼう>があり，このイメージが作品の全てを収束する。

この後，<肯定形>の作品が表われる。各作品において，<軍隊>が<核>

として顕在化し，<戦い>が記述される。また，<軍隊>以外にも，これらの作品では，<森><核シェルター><　の木><村＝国家＝小宇宙><壊す人>という様々な強力な<核>がある。そして，実は，これらの<軍隊>の，事実としての実対化と反比例するように，語られる内容たる<戦い>の記述は，悪事的・黙示的な，メタファーを管理する（と言うより，むしろ，メタファーの独走を制御する）力を持ったゆえに生じた現象である。作中に存在する各要素 ── 事件，人物，現象 ── を保証する求心的な<核>の存在ゆえに，メタファーは，その語りの保証の枠内で，自由にふるまいうるのである。

<われら>の<時代>は，一度<個人的>な<体験>に収束されたゆえに，<同時代>ゲームへと発展しえた。一度言及され，否定された<軍隊>は，この<否定>を経たからこそ<肯定形>となり，語られえなかった潜在的な<戦い>は，さらなる想像力によって，大きく夢幻的な，しかし存在性のある現実物として，顕在化することになる。

註

(1) 本籍における論及は，個々の作品論ではなく，作者・大江健三郎を媒介とし，彼の処女作から最近作までの流れを，一つの大きな<作品>として考える方法に近い。が，資料はあくまで小説テキストに限り，彼の評論活動や個人的プライバシーは，捨象する。

(2) ≪文學界≫　一九五七年十月号
以後，名作品における初出誌・年代を記す。

(3) ≪文學界≫　一九五八年六月号

(4) ≪中央公論≫　一九五八年九月号

(5) （書下し・中央公論社）　一九五九年七月

(6) ≪文學界≫　一九五九年八月 ～六〇年三月号

(7) ≪新　潮≫　一九六〇年九月 ～六二年二月号

(8) ≪群　像≫　一九六二年十二月号

(9) ≪文學界≫　一九六三年二月～六四年二月号

(10) 大江の作品においては，<脱走兵>が多いことも，示唆的である。
「死者の奢り」≪文學界≫　一九五七年八月号
「芽むしり　仔撃ち」≪文學界≫　一九五八年六月号
「戦いの今日」等　── そして，いずれも惨殺される。

(11) ≪群　像≫　一九六七年二月 ～ 七月号

(12) ＜生き方の指針＞ ── 後述する identity に他ならない。　註(21)参照

(13) (12) に同じ。

(14) 書下し，新潮社・　一九七四年十一月

(15) ＜存在価値＞── 後述　identity　註(21)参照

(16) ＜自己を確認＞── 同じく　identity　註(21)参照

(17) 書下し，新潮社・　一九七九年十一月

(18) ＜価値を確認＞── identity　註(21)参照

(19) ＜存在価値＞ ──　identity　註(21)参照

(20) 「ここより他の場所」≪中央公論　臨時増刊≫　一九五九年七月

(21) identity ── 現在流布している文学術語として，その主体が，自らを自らであると確認するところのもの，「自己の存在証明」「主体生」「固有の生き方や価値観」という意味合いで，使用している。動詞　identify .
至文堂『文芸用語の基礎知識』　昭和五四年四月版参照

(22) refer ── 言語学用語としての＜指示＞という意味において使用する。

(23) ≪東京大学新聞≫　一九五七年五月

(24) ≪文學界≫　一九五八年三月号

(25) 書下し，新潮社　一九六四年八月

(26) すなわち，＜否定形＞の＜軍隊＞と同じプロセスをたどることになる。